

2019 年度 8020 公募研究報告書 抄録（採択番号：19-2-07）

研究課題：口腔機能低下は高齢者の引きこもりを促進させるのか？

研究者名：長谷川陽子^{1, 2}、櫻本亜弓²、永井宏達³、玉岡丈二²、澤田隆⁴、岸本裕充²、小野高裕¹、新村健⁵

所属：¹ 新潟大学大学院医歯学総合研究科包括歯科補綴学分野、² 兵庫医科大学歯科口腔外科学講座、³ 兵庫医療大学リハビリテーション学部理学療法学科、⁴ 兵庫県歯科医師会、⁵ 兵庫医科大学内科学総合診療科

高齢者における要介護の発生は、外出せず家に閉じこもる“引きこもり”からの発生が有意に多いこと²が知られており、口元の審美性低下や咀嚼嚥下・発音機能の低下に伴う心理的要素も、引きこもりに関連すると予想される。本調査では、兵庫県丹波篠山地区に在住する65歳以上の自立した高齢者を対象に、外出状態の変化及び身体活動量の変化について約2年間の追跡調査を行い、引きこもりと口腔機能との関連性について検討を行なった。

対象者は、2016年～2019年の間に医科歯科合同学術調査にベースライン時および2年後の計2回参加した427名とした。対象者の引きこもり状態について、基本チェックリストおよび活動量計の結果からそれぞれ判定した。口腔機能は日本老年歯科学会の判定基準に準じて、口腔機能低下を判定し、引きこもり状態と有意な関連性を認めたものを口腔機能の虚弱状態（オーラルフレイル）の判定要素に採用した。また、ベースライン時の身体機能および認知機能について引きこもりに影響する交絡因子として扱い、オーラルフレイルとの関連性について検討を行った。さらに、引きこもりに影響する口腔機能の状態について、コックス比例ハザードモデルを用いて検討を行った。

引きこもりと関連があった口腔機能検査は、残存歯数、歯肉の状態、咬合力、咀嚼能率、KCLの嚥下および口腔乾燥に関わる設問であった。また、高齢で、認知機能に問題があり歩行速度が遅く膝下筋力が弱いほどオーラルフレイルである傾向が有意に高かった。引きこも

りに関して、ベースライン時にオーラルフレイルを認める場合は、口腔機能が健常な場合と比較して1.8倍引きこもりがやすいことが示された。

以上の結果から、引きこもりの増悪には口腔機能低下が関与することが明らかとなり、高齢者の口腔機能維持の重要性が示唆された。